資料

西田幾多郎・全集未収載遺稿（二）

西田幾多郎

一　ヤコッブ〔ママ〕、ベーメ

数学とか自然科学とか云ふものはいふに及ばず、すべて学問と云ふものは順序を蹈んでシステマチカルに行くべきものであると思ふ、秩序を蹈まない人の学問上の議論は多くの場合価値のないものである。哲学も学問である以上は無論其通りではあるが、併し哲学といふものは少し普通の学問と違つて、文学などの様に、全く素養のない人でも、異常の天才であれば専門家も及ばぬ考を出すことがある、今其の一例として独逸のヤコッブ、ベーメと云ふ人の話をして見よう。

ヤコッブ、ベーメと云ふ人は千五百七十五年シュレジーンのゲーリッツと云ふ所から少し隔つたザイデンベルクと云ふ村に生れた。両親は百姓で、若い時にはかれは外の子供と一所に牧畜などに従事して居たが、内気な稍空想的な子供であつたといふことである、子供の時から幻像を見る様なことがあつた。かれはどーも〔ママ〕農業には適せぬと云ふので、十四歳の時靴匠の弟子となつた。一日かれの主人の靴屋夫婦が外出して居なかつた中に、或る一人の客が入つて来て、靴を求めた。かれは主人の留守中に靴を売るのも僭越(1)だと思ひ、困〔つ〕(2)た結果、法外の値段をいつて見た、さうすれば定めて買はぬだらうと思つたのである。然るに案外には此人は望まれただけの高い値段を払うて靴を買ふ

た、而して一旦外に出てからヤコップを呼出して、御前はまだ小さいが後には偉大な人物となつて世界の人が驚く様な時が来るだらう、だから神を信仰して聖書を熟読せよといふ様なことをいつて去つた。何だか張良が圯上に黄石公に逢ふたといふ様な話で、多分事実ではあるまいが、ベーメがかういふ幻像を見たのかも知れない、とに角かれは之れから益々真面目な瞑想的な人間となつて、正しふ身を修め宗教上の瞑想に耽ける様になつた。かれはそれから仲間共が其無信仰な言を弄した時忠告などすることもあつたさうだが、無論彼の言など耳を傾けるものはない、唯ハウスプロフェットといふあだなを贏ち得たのみであつた。

それからすべて独逸の職人のする様に、ベーメも諸方遍歴の途に上つた、此の間に当時盛んであつた神学上の争論や教会の党派争などに触れて真面目な彼は深き疑惑と煩悶とに陥つた。そこでかれはかれ自身聖書を研究して自分で自分の立つべき確実な立脚地を見出さうと努力した。かれは聖書を読む外、熱心に祈つて之を求めた。或る日かれが仕事をして居る中に非常に安慰な精神状態に入り自分の心の奥まで神の光に照らされた様な感がした。外面には何等の変化もなかつたがかれ自身の言によれば其時の歓喜は何とも言ひ現はし様がなく、唯死人の復活に比すべきものだといつてゐる。

千五百九十四年にベーメはゲーリッツに帰つて一人前の靴屋の主人となり、肉屋の娘と結婚し四人の男子と二人の女子とをあげた。斯くしてかれは靴匠の主人として平和な生活を送つて居たが、千六百年の或日、かれは彼の室に於て、偶然日光に輝る錫の器を見て大悟徹底した、かれは万物の根柢透徹したかの様に感じた。初はかれはこれが自己の空想ではないかと思ひ、郊外に散歩してこの空想を打ち消さうとしたが、彼の心眼は野に茂れる一樹一草の点にも徹し、深く天地我と同根、万物我と一体の真理を知るに至つて、もはやかれは自ら見る所を疑ふことが出来なかつた。その後十年を経て彼は再び深き経験を得た、これまで秩序なく断片的に見たものが連絡ある一つの全体であることを徹見した。此時からかれは自分の見た所を書かずには居られなくなつた、併し無論かれは所謂書物をかつて出版

するなどいふ考があつたのではない、唯かれは自分の記憶の為に書いたのである。彼は朝まだ仕事場に行かぬ前とか、晩に仕事場から帰つてから、少しづゝ書いた、かくして出来たものが有名な Morgenröthe im Aufgang[4] の書である。

併しベーメは此書をかいた為に思ひがけない、不幸に遇つた。此書がかねてベーメと不和なる傲慢な分らずやのグレゴリュースといふ僧の手に入つた為めベーメは異信者として官に呼出され、特にゲーリッツから逐ひ出される筈であつたが、漸くのことでゲーリッツに留まることだけ許された、併しその後はかゝるものを書くことは禁ぜられたのである。

その後七年間ベーメは官命を守つて何物も書かなかつた、此間はかれに取つていかに苦痛であつたであらう〔か。〕かれは屢深い憂鬱に沈んだとのことである。遂にかれは守命よりも神命の重んずべきを知つて、再び筆を執る様になつた。かくしてかれは千六百十四年から二十四年〔まで〕の間に深き瞑想に充ちた多くの書物をかいた、現在出版されてあるかれの全集〔は〕六巻からなつて居る。

ベーメは晩年再び異信者として訴へられ、当時の首都ドレスデンまで出たこともあつたが、かれの旧敵グレゴリュースも其中ベーメに先〔立〕つこと数月にして死んでしまつた。かれがドレスデンから帰つて、シュワィニッツといふ人の所に居る中、病にかゝつて家に帰つた。かくしてかれは千六百二十四年十一月十七日の夜美巧な音楽を聞える様に感じ戸をあけさせ、自分は今極楽に行くといつて翌朝六時頃死んで行つたといふことである。

ベーメの思想は深遠にして理解し難い、恐くはかれと同じき深き内省の経験をもつた人でなければ理解し得ないであらう、併しかれの一言一句の中には天才のひらめきである、理解し得ないながらも、何処かに我々の心の奥の深い要求に触れる様なものがある。ベーメの思想は多くの神秘学者の所謂神以前に無顕現の神を認めて居る、この絶対的神は昔消極神学の著者のいつた様に何とも言ひ様のないものである、無であると共に凡てである、光明と暗黒との永

久の反対である。ベーメは之を無目的の意志といつて居る、欲する為めに欲するといふより外にないものである、この意志が翻つて自己を見た時、そこに世界が出来るといつて居る。此考は少くも自分には非常に面白く思はれる、これを今の語にて云へば直観の世界から反省によつて此世界が現れ来る〔こと〕であると解することもできる。ベーメの思想はカント以後の哲学にも大なる影響を与へた、バーデル、シユルリングやヘーゲルなど云ふ如き大哲学者がゲーリッツの一靴匠を尊敬したのも興味あることではないか。

（了）

二　哲学のアポロジー

哲学と云へば一部の人々からは人智の及ぶ事の出来ない様な霊妙不可思議な真理を知り得るものと思はれると共に一部の人々からは哲学的と云へば直ちに空想的と云ふ事の別語であるかの様に考へられて居る。特に自然科学者の中に後の如き考を有する人の多いのは自然の勢である。唯異とすべきは今日の深い自然科学者は却つて現今の批評哲学思想と相一致する様であるが、最も己が学問的知識の基礎に就いて批評的で無ければならぬと思はれる所謂精神科学に従事する人々が、強き反哲学的傾向を有し哲学は遊戯なり、哲学は過去の夢なりなど云つて事もなげに一笑に附し去る如き傾のある事である。固より数千年来の哲学の歴史に遡れば、今日より見て遊戯と思はれるものもあり、過去の夢として一笑に附すべきものも多いであらう。併し仔細に観察すればそれぞれの時代に於て意味ありしものなるべく、又数千年来に傑出する偉大なる哲学者の思想には千年尚ほ新なるものもあるべく徒らに過去の夢として排し去るは恐らくは自己の識見の浅陋なるを証するものであらう。長き人文の歴史の上に於ては、哲学が科学の発展を妨げた場合も多かつたのであらう、併し又それに増して哲学が科学の発達を助けた事を忘れてはならぬ。唯今日の精神科学者が哲学に反する所以が、今日の所謂精神科学なるものは尚ほ嘗て自然科学が中世哲学から独立した時代の如き状況

にあつて、今日に於て此等の学問の取る可き方法として何処までも自然科学的に進むのが善い[5]と云ふに過ぎぬならば、余も或はそうであらうと思はれるのである。併し斯の如き考へからしては現今の哲学に反[6]すべき理由なく、又余は此の種の人に対しては自然科学的方法が唯一の学問的方法なりや、自然科学的方法が自然現象の研究に於て成功したからとて、無批評的に直ちに精神現象の研究の上に於ても、これにて足れりと考へる事が出来るであらうか、精神現象の自然科学的研究と云ふのは、それ自身に何等かの不備の点を含んで居らぬであらうかの問題を尋ねて見たい。此等の哲学問題を研究するのは科学の真理を闡明するものとこそ云ふ可けれ、之れを遊戯とし空想として排すべき理由を見出さぬのである。或人は簡単に今日の自然科学的方法を徹底して行けば此等の問題をも解決し得るかの様に考へて居る人もある様であるが、此等の人々は科学的知識と哲学的知識との区別に明らかでないのではなからうか。

ローレンツの変換からアインシュタインの相対性の考と転し、ミンコウスキーに依つて立派な数学的範式に現はされた時間空間の相対性の原理は、尚ほ専門家の中に疑を抱き居る人のあるに拘らず、之を信ずる人には近代物理学に於てガリレイの偉業にも比すべき斯学の大革命と考へられて居る。併し翻つて考へて見れば、空間時間を方法論的に考へる事は、ニュートンの物理学に就いて鋭い批評的研究を成し、その知識の性質を明らかにしたカントが百年も前に考へて居た事である。固より余は実験物理学者が千辛万苦の実験の後に理論物理学者の天才に依つて工夫せられた前にケーニスベルヒの靄の〔中〕に一室に閉ぢ籠つて考へ〔られ〕た思想と同一の価値のものだと云ふのではない。

ミンコウスキーがその有名なる講演の初に於て、此の考は実験物理学的田地に発在した、こゝに其の強味があると云つて居る様に、科学的真理の価値は其の厳密なる科学的方法によつて証明せられる所にあるのである、広き経験的事実との結合にあるのである。ダーヴイン以前にも生物進化の考を有つて居た人はあつたが、特に氏が其の創立者[7]と見做されるのは之れに依るのである。余はカントの云つた事が無論直ちに科学的真理として相対性原理と同じき価値あるとは云はない。唯相対性原理の如き物理学の思想は、物理学的知識をカント哲学の如き意味に解して、始めて能

く理解し得るであらうと思ふ。相対性の原理を理解する如き思想の根底はカントにあると云ふのは過言と云ふ可きであらうか。仮令一部の物理学者の云ふ如く今日の物理学的知識は、実用主義であるとしても、かゝる思想の創立者としてヒュームと云ふ哲学者のあつたことを忘れる事は出来まい。

哲学者は科学的知識を尊重すべきは云ふまでもなく、科学者自身以上に科学的知識の根本概念を明にすべきものなると共に、科学者自身も正当に哲学的思想を理解することを務む可きであらうと思ふ。勿論或一種の仮定の上に立つ科学者は、更に反省して其の仮定其物を考究する哲学的研究を要せないかも知らない、併し深い哲学的思想は科学其物にも何等かの光明を与へることないとは云はれぬ。元来哲学的知識と科学的知識とは各々其の領域を異にし、互に相照らすべきものであつて、相犯すべきものではない。今日の哲学は思索によつて経験的性則を論ずるのではない、概念によつて事実を曲げようとするのではない、種々なる科学的知識の深い批評がその主なる職分の一である。種々の知識の拠つて立つ所の根底を明にして、それ〳〵の限界を定めるのである。斯く言へば哲学は何等の新なる知識の内容を与へない、空理に過ぎぬと云はれるかも知れない。かくの如き批難は現今の哲学に取つて止むを得ないことであるかも知れない。併し知識其物の性質を明かにするといふことがそれ自身に最も尊き仕事であるのみならず、此の如き批難者に対しては、余は少くともカントの云つた如く未だ研究もせない前に先づその利益を知らうとする好奇心程有害なるものはないと云つて置きたい。

（完）

付記

本五百五十二号に収められた「西田幾多郎・全集未収載遺稿」は、『智山学報』（大正三年～十四年刊行）に掲載された同博士論稿五篇のうちの、左の二篇である。

一、「ヤコッブ、ベーメ」……『智山学報』第一号、大正三年十二月一日発行、三九～四三頁。

二、「哲学のアポロジー」……『智山学報』第三号、大正五年六月十七日発行、十一～十四頁。

前五百五十一号（一二二頁）で予告されたやうに、はじめは、五篇すべてを、大橋良介氏の報告とともに掲載する予定であつたが、本号全体の頁数との関係で、残り三篇と報告との掲載を次号に繰り延べざるをえなかつた。読者の御諒承を乞ふ。なほ、編集上の処置であるが、疑の存する部分で、添加は〔　〕を以て、存置は〔ママ〕を以て指示した。また（1）から（7）までの原文は次の通りである。

（1）靴を売るもの　（2）困たた　（3）正ふし　（4）Morgenröphe　（5）自然科学的に進む人と見るのが善いと云ふに過ぎぬ　（6）現今の哲学を　（7）其の創立者を

（編輯者）